

## 1. 2歳児の入所時分離不安と諸要因の関係

横浜 恵三子(聖和女子大学)

### <研究目的>

横浜は、1975年から1978年まで、保育場面における不安について、保育所児67名を対象に観察した。その結果、分離不安が最も強い年齢範囲は、18ヵ月から24ヵ月であった。また、12ヵ月未満児においては、Ainsworth(1973)も指摘しているように、弁別的分離不安がみられなかった。全般的に分離不安が著しかったのは、12ヵ月から30ヵ月であった。Bowlby(1977)も、母親から分離された場合に、どの年齢よりも、1.2歳児の混乱が激しいことを指摘している。

愛着性と分離不安に関しては、Schaffer & Emerson(1964a)のように、分離不安が強いのは母親に対する愛着性が強いためである、とする考え方や、Ainsworth(1963)のように、分離不安は、母親との不安定な関係を示すものであるとする考え方がある。横浜(1978)は、Ainsworthの見解に一致する結果を得たが、本研究においてはさらに年齢範囲をしぼると共に、その他の諸要因との関連性について検討した。

本研究の目的は、分離不安が著しい12ヵ月から30ヵ月までの幼児を対象に、入所当初の分離不安と、入所3ヵ月後の保育所に対する適応性、入所7ヵ月後の自立性、積極性、母親や他の人々に対する愛着性との関連を調べ、この年齢範囲における集団保育の可能性について、子どもが精神発達の面から考察することである。

### <方法>

被験児は、聖和乳幼児保育センターに、1975年から1978年までの4年間に入所した乳幼児のうち、入所日においてCAが12ヵ月から30ヵ月までの幼児32名(男児16名、女児16名、平均年齢19.9ヵ月、 $SD=5.54$ )である。いずれも保育所経験はない。

調査期間は、1975年4月6日から1978年11月30日までであった。

手続は以下のとおりである。

(1) 各被験児が入所当初に示す母親との分離不安を4エックリストによって記録した。得点化に際しては、Morgan & Ricciuti(1969) Schaf-

fer & Emerson(1964a)を参考にして、発声(vocalization)、表情(facial expression)、視覚的身体的動作(visual and gross motor activity)の強度と持続性をもとにして、4段階に評定した。母親との分離に対して顕著な抵抗を示して、泣き叫び、後追ひ、だだをこねる、などがみられる場合には3点、泣き叫びや後追ひはみられないが、不安な表情、緊張した表情、キックなどがみられる場合には2点、不安で緊張しているようにはみえないが、遊びが不活発で無表情な場合には1点、分離不安が全くみられない場合には0点とした。

観察は毎週1回、朝の登所時に行われた。入所後6週間の平均分離不安反応得点を、各被験児について算出した。4月から6月末までの観察を4年間続けたところ、いずれの年においても大体、4月の初めには著しかった不安反応が減少するのほ、入所1ヵ月後であり、その後には適応性が増加し、入所3ヵ月後にはすべての子どもが保育所に適応するという結果を得た。このような理由から、分離不安反応得点は入所6週間(前期)について平均を算出した。観察はA,B2名が最初の2週間ほ、別々に行なったが、85%以上の一致度が得られたので、3週目からはAのみが行なった。

(2) 分離不安反応と同様に、保育所に対する適応性についても、各被験児の入所7週目から12週目(後期)までの平均得点を算出した。得点化に際しては4段階に評定した。すなわち、母親と離れて、ほほえみながら入室し、すぐに楽しそうに遊んでいる場合には3点、ほほえみはみられないし、自分からすすんですぐに遊ぼうとはしないが、保育士の言葉かけに対して肯定的反応を示し、落ち着いている場合には2点、不安反応はみられないが活発さが欠けており、遊びをしているのかぼんやりしているのが不明な場合には1点、適応性が全くみられない場合には0点とした。

(3) 各被験児の母親に対して、Tizard & Tizard(1971)を参考にして、質問紙を配り、主要愛着対象に対する愛着性と、従属的愛着対象に対する愛着性の強度を調べた。

(4)入所7ヵ月後において、各被験児の自立性と、あそびにおける活動性と積極性に関して、担任保育士2名と観察者1名が、7段階に評価を行なった。3者の間には85%以上の一致度がみられた。

(5)分離不安反応を著しく示した不安定群10名【平均年齢=18.95ヵ月(SD=4.59)平均分離不安反応得点=5.32(SD=1.49)】と、最も分離不安反応が少なかった安定群10名【平均年齢=18.78ヵ月(SD=3.89)平均分離不安反応得点=1.27(SD=0.95)】に関して、後期における保育所に対する適応性反応得点、主要愛着対象に対する愛着性得点、従属的愛着対象に対する愛着性得点、入所7ヵ月後の自立性、あそび、あそびにおける活動性と積極性、の平均得点を算出して、両群の間に有意な差があるかどうかを検討した。

〈結果〉

分離不安に関する安定群と不安定群における各項目の平均得点の比較を示したものが表-1である。すべての項目において、安定群の方が不安定群よりも高い得点を得た。入所7週目から12週目までの保育所に対する適応性に関しては1%水準で有意な差が出た。入所7ヵ月後の自立性に関しては5%水準で有意な差が出た。

表-1 分離不安に関する安定群と不安定群

要因		不安定群	安定群	t
後期保育所に対する適応性	M	5.32	8.1	3.7062**
	SD	1.5	1.68	
母親に対する愛着性	M	13.0	16.0	1.7257
	SD	4.1	3.22	
従属的対象に対する愛着性	M	9.4	13.7	1.4583
	SD	3.69	8.04	
入所7ヵ月後 自立性	M	3.5	5.0	2.2361*
	SD	1.36	1.48	
あそびの活動性・積極性	M	4.8	5.4	0.9486
	SD	0.98	1.62	

n=10      n=10

\* P<.05    \*\* P<.01

〈考察〉

入所当初、分離不安が著しい不安定群は、おおよそその子どもが、保育所に対して適応性を示す時期においても適応が困難であるといえる。また、さらに、入所7ヵ月後において去、自立性に乏しい

といえる。Ainsworth, Bell & Stayton (1971)は、23名の乳児について、母親と一緒にいる家庭場面と実験場面、および1年間の家庭訪問において母子の相互作用を観察し、母親に対して安定的愛着性(secure attachment)を形成している子どもは、少しの間、母親から離されても、しがみついたりせず、ぎげんよく探索し、そのような子どもは、その後しだいに自立性を発達させていることを報告している。

本研究結果は、彼らの結果を裏付けるものであった。すなわち、分離不安の少ない安定群は、母親や他の人々に対して、不安定群よりも、強い愛着性を形成しており、保育所にも早く適応を示し、入所7ヵ月後には、より自立的であった。

1.2歳児は、他の年齢に比べて不安が高く、混乱しやすいことを、横波は4年間の観察から得た。Bowlbyも、3歳までは、たえず身近にいる相手として母親が必要であることを主張し、一連の研究において1.2歳児は特に分離不安が著しいという結果が出ていることを指摘している。(1977) この年齢の子どもたちにとって、とりわけ分離不安の強い子どもたちにとって、従来のような過密な集団保育を受けることは、精神発達的面から考えると、マイナスの面の方が多いいのではないかと思われる。